

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ジャコモ・レオパルディとその時代⑨

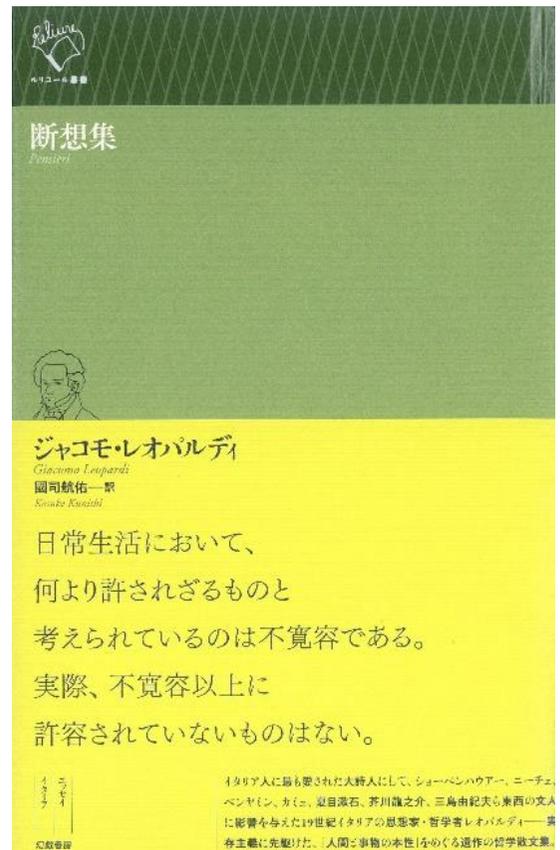
『断想集』とペシミズムの効用

國司 航佑

先月、ジャコモ・レオパルディの『断想集 *Pensieri*』の邦訳が発売された。実はその翻訳を手掛けたのは筆者である。今回は翻訳者として、この作品の魅力を語らせていただきたい。

1845年、レオパルディが他界してから8年ほどが経過した頃、フィレンツェの出版社ル・モニエから、レオパルディの『作品集』が出版された。そしてこの『作品集』に、最晩年に執筆された他の多くの未発表作品と共に、『断想集』が収録されていたのだ。

『断想集』はどのように執筆されたのだろうか。レオパルディには、青年期から20年以上にわたって自らの思索を書き溜めたノート(『雑記帳』)があり、このノートは19世紀末、詩人カルドゥッチらの編纂によって刊行に至った。このことは、以前の記事で触れたところである(本誌345号掲載)。だが実のところ、レオパルディ当人もまた、そのノートの一部を抜粋し、推敲を施して一つの作品として出版する計画を立てていた。早すぎる死によって詩人自らが出版計画を実現させることはできなかったが、その原稿は友人ラニエーリに託されていた。そしてそれは『断想集』という題を付され、1845年『作品集』の一部として出版されることになるのである。



【『断想集』表紙】

出典元: <https://www.genki-shobou.co.jp/books/978-4-86488>

『断想集』には、合計 111 の断想が収録されている。その一つ一つが取り上げるテーマは多種多様だが、全体に通底するのは過激なまでのペシミズムである。レオパルディのペシミズムは韻文よりも散文において直截的に表現される傾向が強いが、そのよい例が『断想集』の文章に表れている。例えば断想 14 は以下のように始まる。

教育に携わる者、とりわけ両親にとって、まったくもって真実である次のことを考えるのは決して小さな不幸ではないだろう。それはすなわち、子供たちは、彼らがいかなる性質に恵まれたとしても、また我々がどれほどの労力と金銭を費やして彼らを教育しようとも、彼らが世間に慣れるに従って、ほぼ間違いなく意地の悪い人間に育ってしまうということである。(『断想集』p. 28)

読者諸氏は、レオパルディのこのような文言を一読してどのような印象を覚えるだろうか。

筆者は、初めてこの文章に出会ったとき、偶然、妻が妊娠していた。そうした状況が手伝ってか、レオパルディの子供に関するこの断想には、率直に言ってほとんど共感できなかったことを覚えている。そしてそれはこの断想に限ったことではなかった。レオパルディのペシミズムには全体として何か誇張しているところがあるように感じられ、表現の妙に感心することはあっても、完全に納得させられることはほとんどなかったのである。

ところがその後、翻訳を進めるにあたって同じ文章を幾度となく読んだ。そしてその間、私を取り巻く環境は変化し、加えて新型コロナウイルスの蔓延に伴って世界全体が大きく変容した。筆者は今、レオパルディの言葉を読み返して新たな感触を覚えている。

子供の成長に関する断想はしばし於くとして、まず「死」の価値を論じた次の断想を見ていただきたい。

死は悪いことではない。なぜなら、死は人間をすべての不幸から解放しつつ、財と共に欲望をも取り去ってしまうからである。最大の不幸は老いである。なぜなら、人間からすべての快

楽を奪い取って、渴望ばかりを残すからである。そのうえ、すべての苦しみを連れてくるからである。それにもかかわらず、人間は死を恐れ、老いを望む。(『断想集』p. 18)

筆者はこれまで、この断想を単なるペシミズムの表出として読んでいた。レオパルディでなくとも、自分の人生に絶望した若者だったら誰でも言いそうな文句ではないか……などと軽く考えていたのである。

だが今読み直してみると、まず、レオパルディの「幸福」の捉え方の鋭さに驚かされる。そもそも「不幸」とは何か。究極の幸福が「快楽」にあるとすれば、単に「快楽」が得られない状態より、それを求めながら手に入らない状態、すなわち「渴望」にこそ、真の「不幸」があると言える。

それでは、こうした渴望状態から脱却するにはいかなる方法を取るべきか。「欲望」は一度満たされても再び増大するものである。だから、真の解決策は「欲望」を満たすことではなく、「欲望」を抱かないことである。そして「欲望」を抱かないための究極の方法は、死にほかならない、というのである。

子供の頃を振り返ってみると、筆者はいつも、死は悪であり生は善であると教えられてきた気がする。それでも、中学生や高校生の頃には「生きることはいいことだ」と言われてもすぐに納得できなかった。その頃、手塚治虫の『火の鳥』という漫画の中で、永遠に生き続けることを運命づけられた人間の物語を読んで深く感動した記憶がある。そこには、永遠に生き続ける男の果てしない苦しみ描かれていた。生きるとは素晴らしいことではない。むしろ苦しみそのものなのだ！ 筆者は、そこに世間では隠されている真実を見たような気がした。

レオパルディの言葉に戻ろう。先に掲げた断想において、今筆者の琴線に触れるのは「それにもかかわらず、人間は死を恐れ、老いを望む」という最後の一文である。かくいう筆者も、子供の頃に悩まされた人生の苦しみをいつの間にか忘れ去って、老いに向かって一步一步生きている。人生は素晴らしいと思っている。いつの間にか、老

いることも決して悪いことではないと考えるようになった。だが、人生をこうして無条件に肯定するとき、そこに偽りの気持ちはないだろうか。そして、仮に自分に偽って生きているとすれば、そのこと自体が筆者の何かを歪めてしまったりはしていないだろうか。

さて『断想集』には、人生や生命そのものを否定する究極のペシミズムもあれば、人間社会を特に批判するペシミズムもある。第一の断想にある次の文言は、彼の心の叫びを表しているかのようで印象に残る。

私が言わんとしているのはつまり、世間とは立派な人間たちに対抗する悪人どもの同盟、あるいは寛容な人たちに対立する卑怯者どもの集まりだということである。(『断想集』, p. 7)

ここに「世間」と訳出したのは、原文では mondo という単語であってその第一義は「世界」である。レオパルディは、「世界／世間」は、悪人どもの集まりにほかならないとまで言い放つのだ。

世間や社会を完全なる悪に見立てるこうした発想も、以前の筆者にとっては簡単に受け入れられるものではなかった。しかし昨今の新型コロナウイルスの蔓延とそれに伴う社会変容は、人間の、とりわけ集団の、あさましく無残な習性を浮き彫りにしつつある。日々飛び交うニュースでは、勇気を持った立派な人間が卑怯な人間の集団によって虐げられる様子が伝えられている。筆者の周りでも、余裕を失った人々の凶暴なふるまいが溢れている。極めて残念なことだけれども、レオパルディの言葉が一片の真理を言い当てていると認めざるを得ないのかもしれない。

本稿の冒頭に紹介した子供の成長に関する断想に戻ろう。わが息子はつい最近2歳の誕生日を迎えた。彼の無邪気な一挙手一投足を見ていると、彼が邪悪な人間に育つなどという考えが私の脳裏をよぎることは一切ない。だが、突き詰めて考えてみれば、彼が優れた人間に育つ保証もまたどこにもないことが分かる。筆者は息子の素晴らしい将来を願っている。しかしそれは淡い期待に過ぎないかもしれない。世間の多くが悪党なのだ

とすれば、わが息子が悪人に育つ可能性も決して低くはない。こう言わざるを得ないのだろうか。

さて、こうして『断想集』を今読み返してみても分かるのは、レオパルディのそれは単なるペシミズムではなく、現実の醜さを浮かび上がらせるリアリズムの表現だということである。現実の醜さに正面から対峙することは、勇気を必要とする。反対に、そこから目を背けて日常を生きるのは、ずいぶん楽なことである。

あまりに悲惨な現実を前にして、今我々は、ともすれば、現実を逃避して無根拠のオプティミズムに身をゆだねてしまいかねない。そんな我々にとって、レオパルディのペシミズムは大いに効果が期待できる薬となりうるだろう。劇薬ゆえに、用法用量には注意すべきだが。



【ジャコモ・レオパルディの肖像】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Giacomo_Leopardi

<参考文献>

ジャコモ・レオパルディ(國司航佑訳)、『断想集』, 幻戯書房, 2020.

(京都外国語大学講師)

ローマで双子育児⑮

浅田朋子

イタリアでは今年2月下旬からの爆発的な感染拡大に伴い、コンテ首相はそれまでロンバルディア州全地域及び4州の14県に適用されていた移動制限を3月10日の朝からイタリア全土に適用すると発表した。

北部でのコロナウィルスによる悲惨な状況、そして感染者、死亡者がどんどん増えていく状況を見て、「これはただならぬことになってきた・・・」と皆が感じ始めていた矢先の「全土移動制限」であった。



【stay home 中、双子とよく作った Ciambellone】

学校・教育機関は閉鎖、食料品・生活必需品の販売店や薬局及びスーパーマーケットを除く全ての商業及び小売り販売活動の休止、そして3月末には必要最小限の外出(食料・日用品の買い出

し・健康上の理由による通院等)または緊急の理由がない限り禁止となった。違反者には罰則があり、警察や軍隊が常に街を巡回していた。

外出時には「自己申告書」に外出理由・目的地・住所等を記入してサインし、携帯することが義務付けられた。緊急の理由がない限り住居や居住地外に出ることはできず、介助を必要とする者以外は原則1名で外出。家族・友人宅への訪問はもちろんできない。自宅近辺で対人距離1メートルを確保しながら個人で運動するのは可能だが、公園等は閉鎖されており、屋外での娯楽・レクリエーション活動は禁止である。親1名と自分の未成年の子を連れた散歩は住居周辺に限り許可されているが、ほとんどの親は自主的に外出させていないようだった。

最新医療とシステムの壁がガラガラと崩れ、死亡者が増え続け悲鳴を上げている医療現場や関係機関を目の当たりにして「どうになってしまうのだろう・・・」と大きな不安と恐怖に、普段は前向きなイタリア人も暗くなっていった。

夫の画廊も営業が禁止されたので、家族4人で家に引きこもった。しかし私も夫も出不精で家にいるのが好きなので、あまりストレスに感じることはなかった。双子の5歳の娘たちも、私たちに似たのかずっと家にも楽しそうに遊んでいる。「お外に行きたくないの?」と聞いたら、「コロナウィルスあるし、行かない」とすぐ真っ当な答えが返ってきた。「でも本当は行きたいんちゃう?」とさらに尋ねると、「家でいい。ママとパパとずっといっしょだから楽しい」と可愛いことをいう。

「今、一番行きたいところはどこ?」と聞くと「う～～ん」としばらく考えこんだ。きっと「(イタリアの)おばあちゃんの家」か「日本」だなど確信して待っていたら、「バール!」と言った。「そうか、バールか・・・」と夫は苦笑いしていた。その夜、義母から電話がかかってきた。「双子も色々行きたいとことがあるだろうねえ・・・かわいそうに。ここに来たいって言っているでしょ・・・?」と悲しそうな義母に、「いや、バールに行きたいらしいですわ」とはさすがに言えなかった。

同じマンションの2階に住む、私の唯一のママ友であり双子男児の母親であるレーナちゃん宅に遊びに行くこともできないので、電話して様子を

聞いてみた。一日中外で遊び、サイクリングやカーヌなどをするアウトドアなレーナちゃん一家はさぞ窮屈な思いをしているだろう。動きたい盛りの5歳のロシア人戦士は家で暴れまくっているのではないか。「双子はパパと毎日遊んでもらって喜んでるの。外に行きたいと言わないのよ」とのこと。保護者の SNS でも、大人は辟易としているが子供は一緒に楽しそうである。小さい子供にとって、親とずっと一緒にいられることは何よりも幸せなのである。

「しかし、大変なことになったね」「うん、どうなるんだろうね・・・」。いつもは何事にも動じずあっけらかんとしているレーナちゃんも暗い。彼らはレストランを経営している。お客さんには観光客も多いので、この時期の休業は打撃が大きい。しかも突然の営業禁止で事前に仕入れていた食材はレストランに残ったままだ。それをレーナちゃんの夫は家に少しずつ持ち帰って消費していた。「いいなあ～、レストランの食材・・・」。レストランの地下には高級ワインが並ぶ立派なワイン貯蔵庫がある。そこからワインを持って来ては毎日飲んでいるようだった。「もうね、この封鎖終わった頃にはcantina（ワイン貯蔵庫）空になってると思うよ」とつぶやいた。

「・・・ところで、毎日何してる？」「まあ、ほぼ毎日子供とお菓子つくってるかな」「うちも」。レーナちゃんが送ってきた写真には、屈強なロシア人戦士に成長したガタイのいい双子の息子たちが、眉間にしわをよせ真剣な顔つきで可愛らしいハート型のケーキにピンク色の生クリームを力いっぱい絞り出す様子が写っていた。孫や友人に会えず落ち込んでいる義父にこの写真を送ると、「誰を暗殺するつもりなんだ」と大笑いした。

実用的でレパートリーが際限なくあり、有り余る時間を消費できる一石二鳥な「料理する」に、近所のスーパーで買える「限られた材料で」という難しさが加わり、食にこだわるイタリア人の多くが熱中していた。朝にはドルチェを作る甘い匂いが窓から流れ込み、昼ごはん近くになるといろんな料理のいい匂いがしてくる。夫とくんくん匂いを嗅いで「あ、ラザニアやな！」とか「なんか焦げくさい！ニンニク焦がしたな・・・」などと予想しあった。

全土封鎖が発令された最初の一時期、小麦粉

やパスタ等の食料が品薄になった。もちろん必要最低限の食料を生産する工場等は稼働しているが、大幅に人員は削減されている。しかも全土封鎖で春夏にかけて近隣諸国から農場に出稼ぎにくる外国人がイタリアに入国できないので、農家は人手不足で作物の収穫ができない状況だとニュースで聞いた。この時ばかりは「ああ、本当に食料がなくなってきたらどうしよう・・・」と、今までの普通になんでも手に入る生活がいかに豊かであったかを思い知らされた。



【再会時に義父が作ってくれたカルボナーラ】

買い出しは夫が担当した。10日に一度の買い物はたいへんな量になるので夫に頼むしかない。外出の頻度は制限されていないが、全ての場所で入場制限があり長蛇の列ができるので、なるべく一つの場所でまとめ買いの方が効率が良い。近所で一番大きなmercato（市場）に行き、八百屋、肉屋、魚屋、alimentari（食料品店・主にハムやチーズの加工食品、調味料、パスタや小麦粉など）を回り、すべての食材を調達する。買い出しから戻って来た夫は汗だくだ。マスクに慣れ

ていないイタリア人なので息苦しいのかももう倒れそうである。

「今日もいっぱいだったよ・・・」せっかく早めの時間に行ったのに、すでに長蛇の列ができていたらしい。食材店で夫の前に並んでいた老人が「生ハム80グラム、以上」と注文したとたん、列に並んでいたおじいさんと顔見知りの若者が「80グラムの生ハムを買うだけで家からでちゃダメだよ。大学の教授だったのに、もうニュースも見てないのかい?!」とおじいさんにきつい冗談を言った。おじいさんは、待っていましたと言わんばかりに「わたしは IMPS (社会保障・年金機構)に協力してやってるのさ! お前にいい仕事を紹介してやろうと思ったけど、やめとくよ」と反撃した。

そのやりとりで、黙って列に並んでいた人たちも加わり、最後には皆が笑いあった。老人が一人で家にいる孤独と不安、失業した若い層の焦りや絶望感をお互いに理解した上での、重い問題や苦しい状況を皆で乗り越えようとするローマ流のやり方なのだ。

4 月も半ばを過ぎ、天気の良い日が続き気温も上がってくると、近所の人々が続々と屋上へ出没し始めた。太陽の光が大好きなイタリア人がこの晴天を逃すわけにはいかないのである。屋上なら居住地域内で、マンションの住人だけなので、密集することもない。下に住む税理士のおじいさんはトマトやバジリコ、ズッキーニの苗を植え、朝から晩まで屋上で植木の世話をしていた。「食糧難に備えているんだよ」と笑う。双子もたまに外の空気を吸いに屋上に連れていき少し遊ばせていた。いつ行ってもこのおじいさんがいるので、双子はこのおじいさんのことを「屋上の Signora」と呼んでいた。なんか怪しい映画のタイトルみたいやな・・・と思いつつも私と双子の間でこのあだ名は定着した。そのうち隣のおばさん(推定 75 歳)が屋上にサングラスをして水着姿で現れた時には、とうとうおかしくなったのかと思った。どこから持って来たのかビーチチェアに寝そべり、マニキュアを塗ったりフルーツを食べたりして毎日 3 時間ほど屋上で肌を焼いているようだった。このおばさんだけではなく向かいのマンションでも若い女の子やおじいさんが同じように日光浴していた。置かれた状況に逆らわず、できる範囲内で無理することな

くやりたい事をする能力に長けているのである。

頻りに発表される首相令では毎回制限が延長され、なかなか好転しない状況に焦りと苛立ちを感じ、精神的にも経済的にも限界が近づいてきた頃、ようやく死者数が減少してきた。全土移動制限が始まって一ヶ月半、やっと明るい兆しが見えてきた。

人に会っておしゃべりするのがライフワークのイタリア人が、マスクと手袋をつけ、黙って列に並んで買い物し、足早に帰宅する姿は衝撃であった。騒々しい街の音、大声でしゃべる人々の声が聞こえないここは本当にローマなのかと思わせるほど、皆は厳しい規則を守っていた。

苦しい状況でも共感し助け合い、先の見えない暗いトンネルを、3ヶ月かけ皆で通り抜けてきたのである。

家族訪問の規制が緩和され、以前はほぼ毎日義父母に会っていた双子を連れ、義父母宅に行った。双子を見て義父母は涙ぐみ、小さな手を強く握った。



【再会時に義母が作ってくれた野菜スープ】

(元当館受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>